

2節 岩国の町割

松岡 智訓
岩国徴古館

1. 岩国城下町の成立過程と特徴

(1) 吉川氏の岩国移封

1600(慶長 5)年、時代の大きな節目となった 9 月の関が原の戦いの後、11 月 2 日、吉川広家は、宗家である毛利氏の領地(周防国、長門国 29 万 8480 石余)内で、周防国玖珂郡・大島郡の内から 3 万石(寄子衆 3 人の知高 4370 石を除く)の地を分知された¹⁾。これは、上方口にあたる周防岩国に居城を構え、新たに安芸国の領主となった福島正則と協力して忠勤に励むように、との徳川家康の内意によるものであった²⁾。しかし、一方では、安芸国との国境に位置する重要な岩国が分知されたことは、毛利氏からの吉川氏に対する信頼ともいえる。「敵一国の人数を将来りて、岩国を攻める時ハ、岩国の人数にて防ぎ難き事有るべし。後詰遅々して今津え押込れ、岩国の城を責落されてハ後の軍必仕にくく成て、終には城下迄押入らるる様に成るべき事也。岩国ハ名誉の要地なれば敵を防ぐに便り有。敵に取られてハ大きな害と成境なれば、萩より爰を緩せに被成事は大事至極の事也。岩国を堅固に持なす様にすれば、両国は堅固也と知給ふべし³⁾」とあるように、岩国は毛利氏の防長両国支配にとって、重要な場所であった。また、西の国境である長府には毛利輝元の養子であった毛利秀元が配置されており、東西の守りを有力な一門で固めたと考えられる。いずれにせよ、関が原の戦いで家康に敗れた毛利氏は大幅に領土を減らし、同様に吉川氏も出雲など 14 万石余(12 万石とも)⁴⁾からの大幅な削減となった。

1601(慶長 6)年 8 月に初めて岩国に入った吉川広家は、拠点となる城下町の造営のため、年内に都市計画案を作り、翌 1602 年より実施した⁵⁾。城下町の中心となる城地の選定は重要事項であったが、広家が選んだのは中国路(山陽道)に近く、錦川と横山(城山)に囲まれた横山であった。

岩国は、大内氏の時代から周防東部の要衝として重要視されていたが、1555(弘治元)年以降は、毛利氏による防長侵攻の軍事拠点となっていた。中でも、大内氏が横山に開いた永興寺には、広家の祖父にもあたる毛利元就による本陣がおかれていた⁶⁾ことから、横山は毛利氏、吉川氏にとって因縁も深く、また、よく知る土地でもあった。それらのことから、広家は、岩国に入った後に領内を見分してはいるが、横山の地を城地として選んだことは、岩国移封が決まった段階で候補としていたと考えられる。

(2) 吉川氏の城地選定について

戦国時代とも呼ばれる中世末期、城は軍事的要害として多く建設されたが、その規模は決して大きくなく、いわゆる天険と呼ばれるような自然を利用したものが基本であった。しかし、近世に入ると、戦術の転換から兵や物資などを集中させるようになり、城そのものの数は減ったものの、より大規模なものが築かれるようになった。また、統治の中心地としての機能が求められるようになり、交通の要地を押さえることが重視された。このような時代の変化を受け、国内における城地の選定は、山から比較的小高い丘陵などの高地へ、さらに平地へと移っていった。こうした変化は、周辺に統治上必要な機能を効果的に配置することを可能とし、城下町という一つの都市形態を発達させることとなった。そして、統治の中心地として交通の要地を押さえることが重視されたことから、近世の都市計画においては、陸上交通は当然のことながら、海や川を利用した計画が進められた⁷⁾。



図 1.2-1 城下町周辺の様子 『岩国領全図(部分)』(1668(寛文 8)年, 岩国徴古館蔵)

吉川氏の城地選定をみてみると、交通の要地を押さえるという点においては時代の流れに沿っており、横山は陸上交通の要所である中国路(山陽道)、瀬戸内海と領内を横断する錦川の水運を活用するのに適地であるといえる。しかしながら、横山は横山(城山)と錦川に囲まれており、城下町を機能的に形成するには、平地の面積が不十分という問題もあった。また、津和野城や備中松山城のような再利用ではなく、新規で山上に拠点となる要害を築いたことは、前述のように平城が主流となっていた近世では稀な例であった。これは、吉川氏が横山を選んだ理由として、統治の面だけでなく、軍事的要害としての機能も重視していたためといえよう。つまり、交通の要地を押さえるとともに、錦川や横山(城山)を防衛に利用する目的があったと考えられる。これは、当時、関が原の戦いに続く戦争が予感されていた時期に移封されたことに加え、関が原の戦いにおいて、宗家である毛利氏の承認を得ずに徳川家康に内応して戦闘に参加せず、結果、毛利氏の領土を減らしたことも少なからず影響していると考えられる。それがなければ、経費の面でも、岩国への移封による新たな城下町の計画に加え、江戸城などの普請の手伝いによって、多額の出費をしている当時の経済状況の中で、あえて経費のかかる山城を選ぶことはなかったであろう。そのことから考慮しても、次なる戦争を想定し、その際には防長二国の防衛のために戦い、安芸国との国境である岩国の地を外敵から死守することを重視した城地選定だったのでなかろうか。中国路(山陽道)を見下ろせる場所で、三方を錦川に囲まれていた横山(城山)は、籠城するには、最適地であり、その高い防衛機能を活かして時間を稼ぎ、毛利氏からの援軍を待つという戦略を想定していたと考えられる。

実際には、それを証明するような戦争は起こらず、この城下が戦火にあうこともなかったが、時代は幕末まで下るものの、1866(慶応 2)年の第二次長州征討(四境戦争)の際、それを裏付けるような作戦が立てられている。かつて岩国城の天守があった横山(城山)に陣屋を築き、広島側から幕府軍に攻め込まれ、領内への侵入を許した場合、領内の兵を城下に集め、城を枕に籠城して戦うことによって、一時的に幕府軍を撃退し、それまでには長州本藩の援軍も来ると考えたのである⁸⁾。岩国では、少ない兵を各地の防衛に派遣していたことから、数で勝る幕府軍が岩国城下に迫ることが予想されていたため、この作戦が考えられたのであるが、実際は、緒戦に長州藩が勝利し、戦線が広島へ移ったため、陣屋も実際に使用されることはなかった。

このように、面積として不十分な横山に城地選定をおこなった背景は、時代の影響を受けて軍事的要害としての機能を重視したことによるものであったが、そのために、すべての機能を一箇所に集約することはできなくなり、城下町の機能を錦見、川西、今津へと分散させて配置

することとなった。これは、1615(元和元)年の大坂夏の陣以降、大きな戦争の可能性がなくなり、内政が重要となる時代となると、機能的でないことは明らかであった。特に、大半の家臣が暮らす錦見と政治の中枢機関があった横山は、最も密接でありながら、外堀の役目を果たしていた錦川に分断されていたため、一体的な統治を可能とする手法が求められた。錦帯橋の発想は、この解決策となったものであり、1673(延宝元)年の錦帯橋の完成が統治の中心地としての岩国城下町を完成させたといえる。

2. 各地区の概要

(1) 岩国城と城下町の成立過程

初代岩国領主吉川広家の計画は、横山(城山)の山上に要害を築き、その東側を大手、中国路(山陽道)のある西側を搦手とし、山の東側の麓である横山に領主の居館である御土居を築くことによって、山上の要害とともに岩国城を構成するものであった。また、前述のとおり、城下町として面積が不十分であったため、錦川を天然の外堀として、内側となる横山に諸役所や上級武士の屋敷地を、対岸にある錦見には、中下級武士の屋敷地と玖珂町以下七町を置く計画とした。さらに、中国路(山陽道)の脇道から横山に至る川西には、道沿いに下級武士の屋敷地と上級武士の下屋敷(別邸)を置くこととし、錦川下流の今津の一部を水軍の拠点とした。

1602(慶長 7)年、まず山の麓の居館が着手され、上の御土居(広家の母の居館)と下の御土居(広家の居館)が築かれた⁹⁾。その後、1603(慶長 8)年からは山上の要害を起工、1608(慶長 13)年に竣工し、森脇飛騨守らに城番を命じた¹⁰⁾。

しかしながら、1615(元和元)年、一国一城令が出たことによって、山上の要害を壊すよう毛利輝元から伝えられた。これに対し、広家は、周防の国には岩国以外に城がないため、壊す必要がないのではないかと主張したが、長府(輝元の元養子である毛利秀元の支配地)の城を壊すので、岩国も同じようにするようにと重ねて伝えられ、最終的に壊すこととなった¹¹⁾。また、1638(寛永 15)年、島原の乱での廃城利用を教訓に石垣の破壊も命じられ、山上の石垣もことごとく破壊することとなった¹²⁾。

このようにして、防衛のために築かれた山上の要害は破却されたが、その後も、御土居は政治の拠点として使われ、大きな都市計画の変更もおこなわれなかった。



図 1.2-2 『御城山平図』(1786(天明 6)年前後、岩国徴古館蔵)

(2) 岩国城(山上の要害)

山上の要害は、山頂部の本丸を中心として、北側に北ノ丸、南側に二ノ丸、西側に水ノ手の郭群の4つの区画で構成されていた。図1.2-3にあるように、これらの郭の中心部は総石垣で構成されており、それぞれの要所には櫓(図1.2-3の赤彩色)が設けられていた。また、出入り口となる虎口には、直線的な平虎口ではなく、防衛に適した舛形虎口が多く採用されていた。これらは近世城郭の縄張り構造といえる。

その一方で、これらの郭群を取り囲むように堅堀がめぐらされており、本丸と北ノ丸の間には素堀の大きな空堀(19.6×58.2m)が掘られている。また、郭の外側には一部土塁も築かれており、これらの防衛のための機能は中世城郭の縄張り構造といえる。

つまり、岩国城は、近世城郭と中世城郭の縄張り構造が混在しており、ここからも、吉川氏が戦争を想定し、防衛を重視していたことをうかがうことができるのである。なお、本丸の東側が横山にあたり、麓の御土居や堀、外堀の役割をはたす錦川へと続いていた。

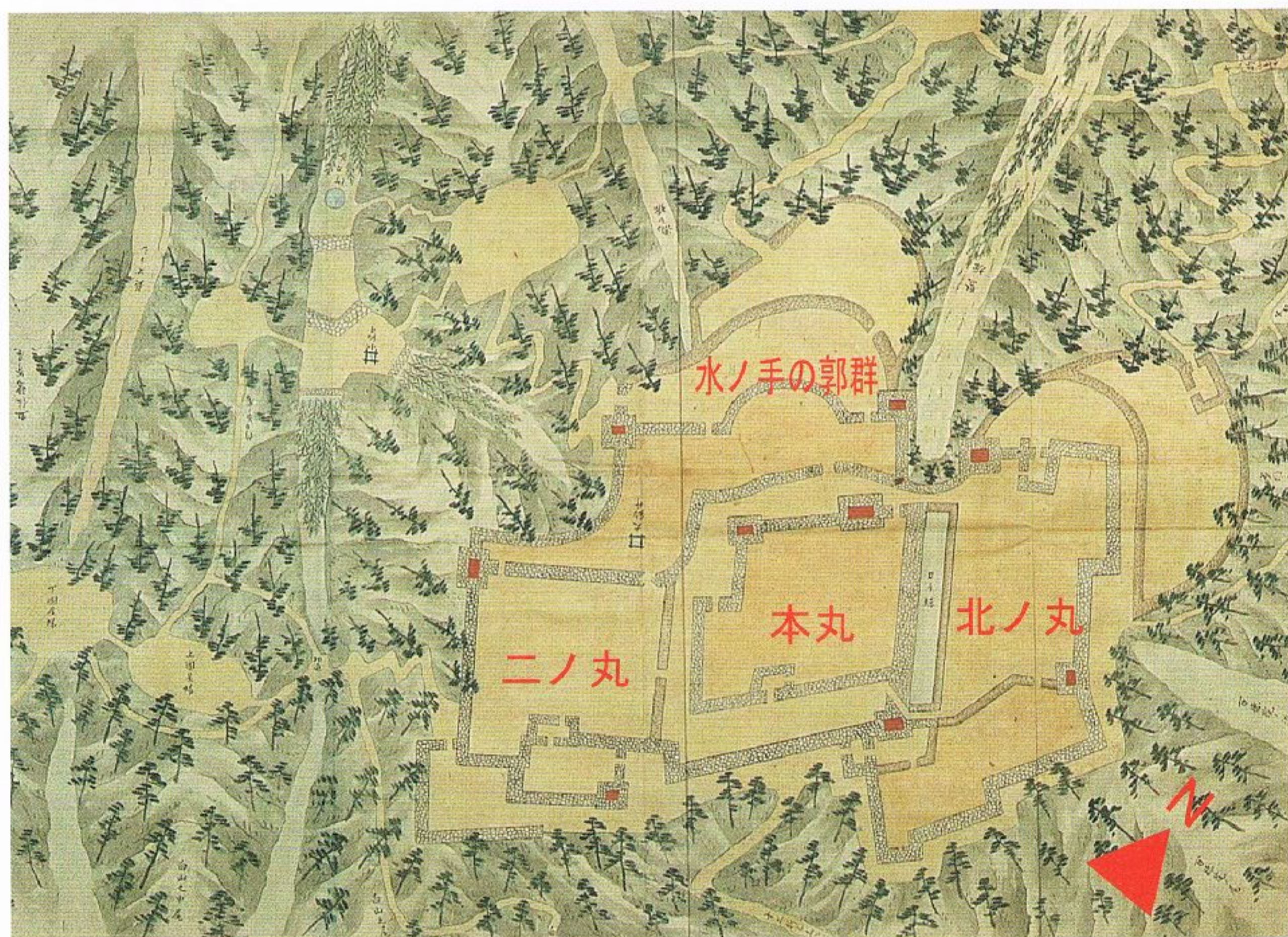


図 1.2-3 『岩国城平面図』(1867(慶応3)年前後、岩国徴古館蔵)

(3) 横山

横山は、1309(延慶2)年に大内弘幸によって永興寺が創建された後、周防東部の文化と安芸方面への出撃の拠点として大内氏に重視されていた。それを示すように、永興寺には大内氏から、岩国本庄内横山、向棚井(後の川西)、波野郷内佐多、生野が寄進されている¹³⁾。そのため、横山一帯が永興寺の寺領として堂塔が建ち並び、その前面に門前町も形成されていた¹⁴⁾。

吉川広家が岩国に入った後、永興寺領内の既存の建物は解き払われ、横山(城山)山上に要害、麓の平地に御土居や勘場以下の諸役所、上級武士の屋敷に再区画し、外側に築地(土手)をめぐらせて郭内とし、その両端には上口門(千石原門)、下口門(万谷門)を設け、中央に乗越門をあけ、錦見と渡舟で結んだ(後に錦帯橋が架橋)。更なるその両端外側に足軽の居住地を設け、郭内の防備を強化した。上口門の近くには、要害の鬼門を押えるものとして万徳院を置き、城の防備の一翼も担わせた。また、1648(慶安元)年の城下町拡張にともなって、郭外に川原町が設けられた¹⁵⁾。



図 1.2-4 『岩国城下町(横山)』(江戸後期, 岩国徴古館蔵)

山上の要害は、前述のように一国一城の令により破却されたものの、御土居は領主の日常の居所であるとともに、政治の拠点として使われていたため、番所が 7 ヲ所、蔵 10 棟、井戸 10 ヲ所と大規模であったほか、3 面に堀をめぐらし、3 ヲ所に矢倉を置くなど、「麓ノ館厳重ニシテ、堀有櫓有。外ニハ上口・下口・中路エ三門堅固ニテ、城郭ノ遺形猶ホ有テ、誠武人之居所也。山川江海ノ形勢ハ、実ニ治乱兼備ノ勝地也。領主代々安穩永久ナルコトハ、天地ト共ニ無窮ナラン¹⁶⁾」といわれるような防衛機能は十分に備えていた。

また、御土居を政治の拠点として使用するために、主要な建物は表御殿、納戸、裏御殿に分かれていた。表御殿は領主が他藩の使者や家臣と対面し、また、接待する際に利用され、御用所が隣接して建っていた。御用所は当初、記録所と呼ばれていた役所で、御蔵元から提出された議案を審議するところであった。納戸は領主が日常生活を行う場所で、裏御殿は領主の夫人や子女の居所であった。なお、御土居の名称は、1698(元禄 11)年、5 代岩国領主吉川広達(吉川元就)の幼時の居所として仙鳥館が新築された時、御土居の呼称を御館と改めた¹⁷⁾。更に 1868(明治元)年、12 代岩国領主吉川経幹が大名となり城主格とされたことにより、御城と呼ばれるようになった¹⁸⁾。

(4) 錦見

錦見は吉川広家が入封した時には、鳴子岩ではね返った流れが吸江に当たり、そこから二流に分岐して下り、吸江の手前で分流する流れと、三筋の流れの氾濫原となっていたといわれている。これを向山の山際に堀川して分流を統合して一流とし、鳴子岩懸口から 20 町 17 間の惣土手を築いて、河床を固定すると共に、錦見の屋敷地を確保した¹⁹⁾。大規模な河川改修工事によってこのような荒地を城下町として利用していることから、城地選定を基本とした城下町成立であったことをうかがうことができる。

錦見の乗越口から南東へ幹線道路として大明小路を設け、その両側は中級武士の屋敷地とした。大明小路は日光寺で突き当たってカギ状に屈折し、浄福寺で再び屈折している(善教寺小路)。さらにその先には、城下の発展にともない、1626～1644 年(寛永年間)頃に新小路が完成し、1648(慶安元)年には新小路町²⁰⁾が設けられた。なお、新小路町の東端は、木戸門(1809(文化 6)年

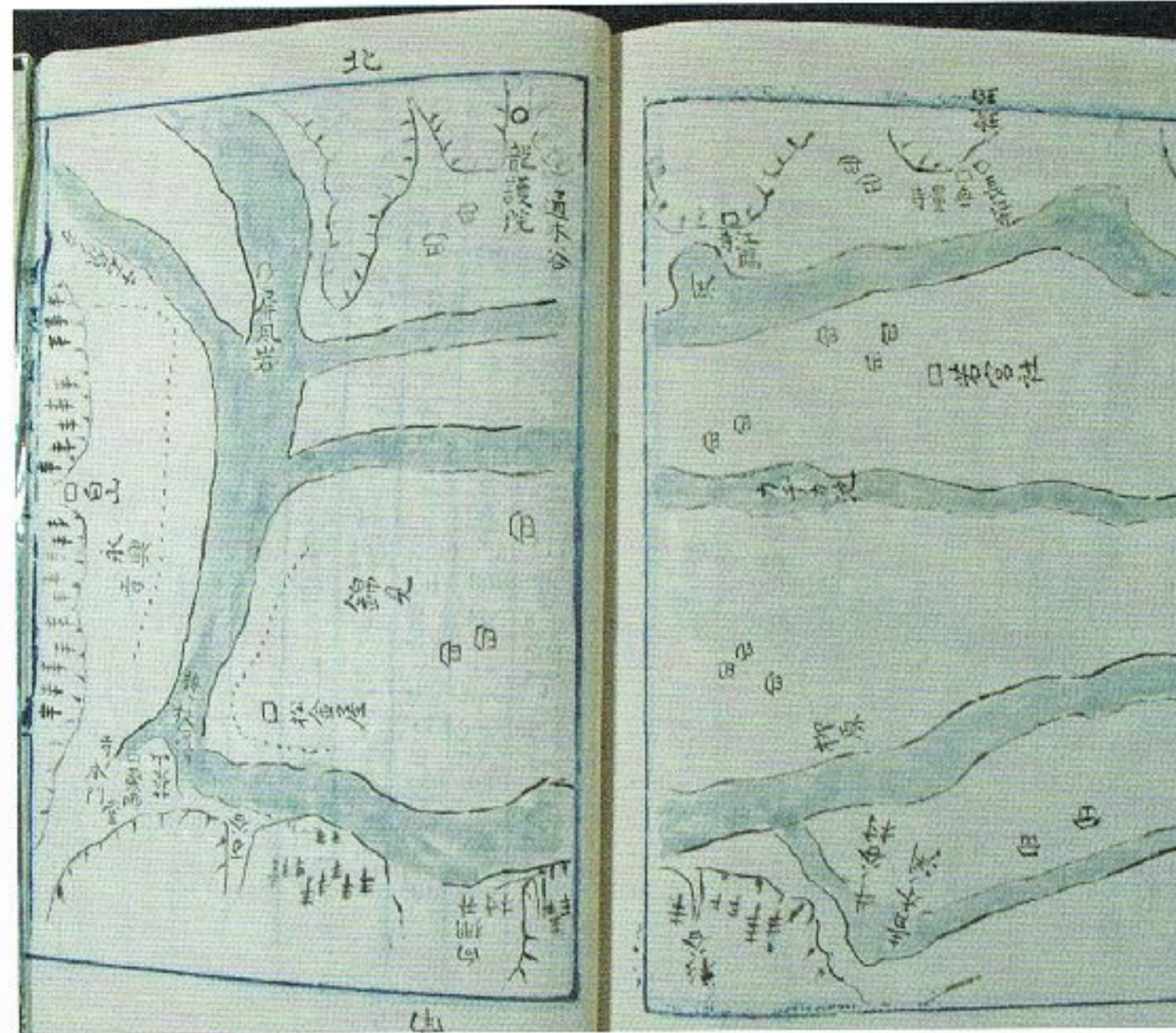


図 1.2-5 1600 年頃の錦見のようす 『岩国沿革志』(1902(明治 35)年, 岩国徴古館蔵)

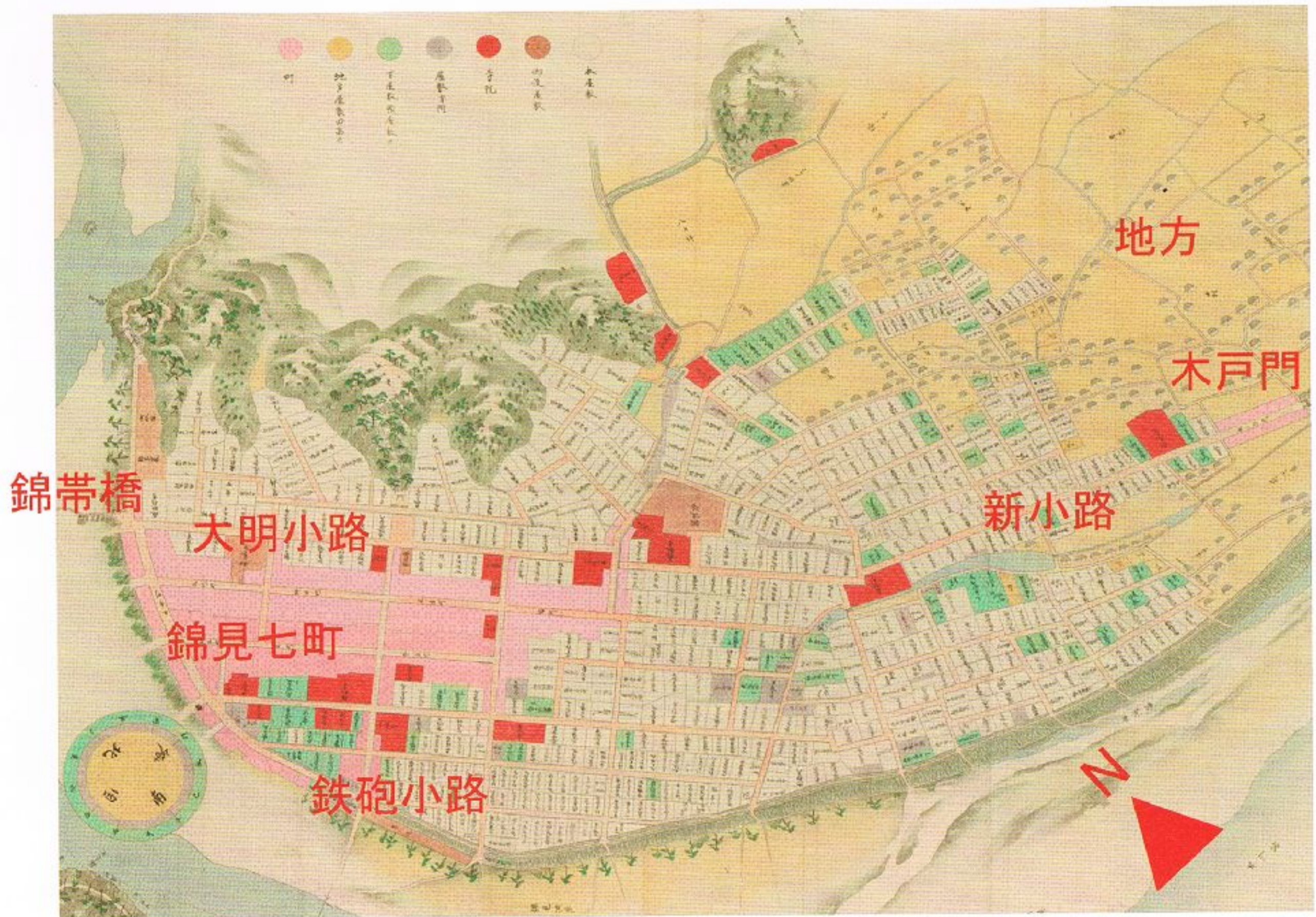


図 1.2-6 『岩国城下町(錦見)』(1867(慶応 3)年, 岩国徴古館蔵)

に瓦葺き総門となる)によって地方(農村地)と区切られていた。

大明小路の南西の二筋は町屋にあてられ、二筋の内、北側の通りを本町と称し、横山側から玖珂町、柳井町、米屋町、塩町に分け、南側の裏町を材木町、魚町、豆腐町とした(錦見七町)。町屋には玖珂や柳井なども含め、領内各地から移住させた商人を住ませた。1654(承応 3)年の大火で材木町から発生した火が塩町に及び、寺や武家屋敷も含めた 229 軒が消失したため、1655(明暦元)年に再町割りをし、防火のために横町を拡張した²¹⁾。このときの町割りが現在まで残されている。町屋の南西側には、足軽階級である鉄砲小路と呼ばれる鉄砲組の屋敷地を配置し、南東側には中下級武士の屋敷を置いた。

錦見は、岩国城下町の中心地域であり、吉川氏家臣団の大半の居住区となっただけでなく、周防東部の経済活動の面で重視された。

(5) 川西

川西は古くは向柵井と呼ばれており、17世紀の末頃から、大川(錦川)の西にある村ということで川西村と改められたと伝えられる²²⁾。大内氏の時代には永興寺の寺領の一部であった²³⁾。横山の陸続きで南側にあたり、中国路(山陽道)から城下町へ入る脇道が通っており、その道沿いを中心に下級武士の屋敷や上級武士の下屋敷(別邸)などが置かれた。この脇道は、山陽道を柱野の西氏から分岐して、城山の麓を抜けて川西に入り、錦川を船か錦帯橋で渡って錦見に入った後、関戸で中国路(山陽道)に合流するもので、本道ではないものの、錦帯橋の見物や洪水による増水で山陽道の渡しが利用できない際など、城下へ立ち寄るためにも利用されたことから、領外の人々にも多く利用された。なお、城下への入口には木戸門が設けられていた。

そのほか、町屋や藩蔵(米蔵)も置かれ、町の付近には1800(寛政12)年から櫛の実から蠟を造る蠟板場が設けられた。また、脇道の南側は地方(農村地)となっていた。



図 1.2-7 『岩国城下町(川西)』(1867(慶応3)年, 岩国徴古館蔵)

(6) 今津

今津は、吉川広家が岩国に入った当時は、山側に白崎八幡宮や天神社があったものの、山すそにある小さな村であった。平地が少ない地域だったが、吉川氏の江戸時代を通しての開作により平地が開かれていった。また、門前川が錦川の主流であったのを、吉川氏が入った後に今津川を掘って主流とした²⁴⁾。川寄りに水軍である御船手組の屋敷と、その生活を支えるための町屋のほか、御茶屋、萩蔵と藩蔵、川口番所、船入りなどを置き、山側と河口は地方とした。御茶屋は、藩主が港を利用する際の休憩所としてだけでなく、今津船手の奉行所でもあり、藩内の漁業関係の役所であった。萩蔵は、山代紙等、錦川上流にある萩藩の山代宰判内の特産品を錦川を利用して集め、今津から大坂などへ送るために建てられた蔵で、1627(寛永4)年に萩藩へ貸与し、1649(慶安2)年に拡張した。藩蔵は年貢米等を収蔵しており、その側には高札場が設けられていた。

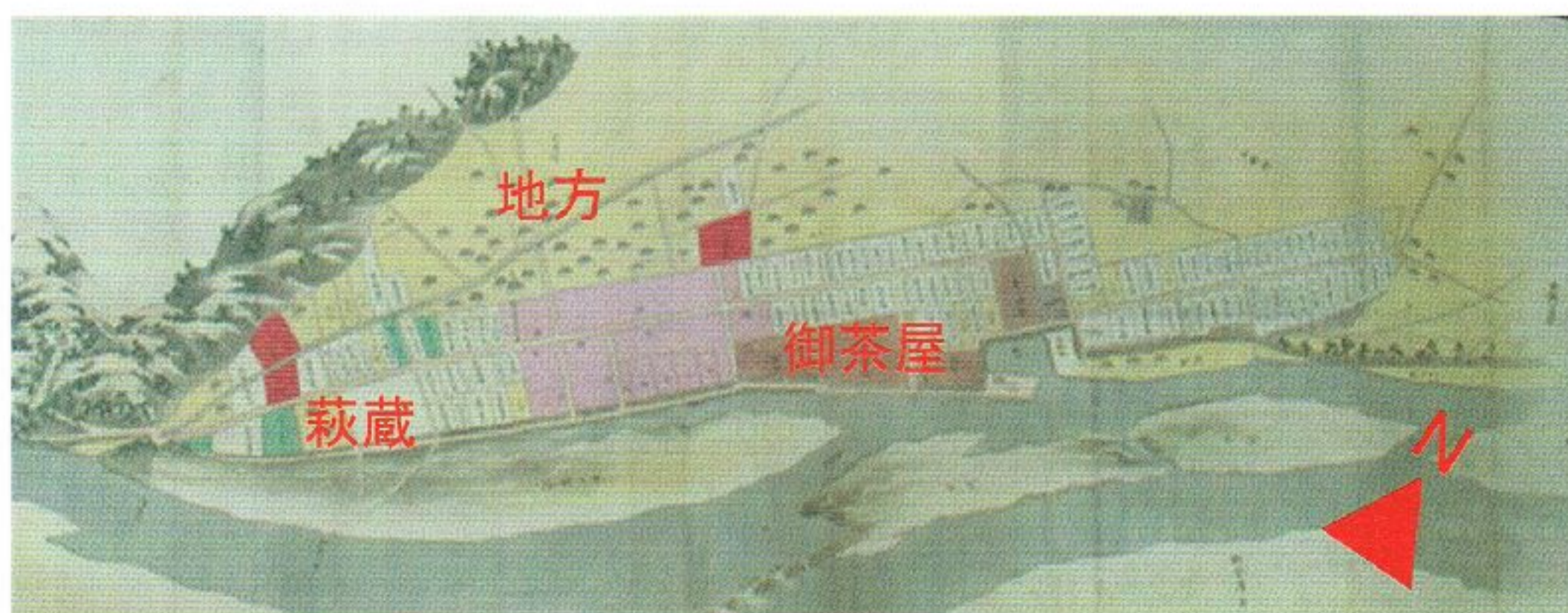


図 1.2-8 『岩国城下町(今津)』(1867(慶応3)年, 岩国徴古館蔵)

3. 吉川氏と土木技術

(1) 吉川氏と土木技術の歴史

岩国城下町成立の過程においては、岩国城や錦帯橋の創建、錦川の改修など、多くの土木工事を必要とした。特に錦帯橋に関しては、敷石や橋脚など、河川での工事に高い技術が求められた。これらを可能にした背景には、当時の武士階級全体の土木技術の高さはもちろんであるが、吉川氏の技術によるものも大きいといえよう。

吉川氏と河川工事とのかかわりは古く、吉川氏が駿河国を拠点としていた鎌倉時代にみることが出来る。1250(建長 2)年、鎌倉幕府は、京都二条にあった閑院内裏の造営にあたり、御家人に建設を課役として担当させた。駿河国の入江一族である船越や吉河藤兵衛尉などは、内裏の築地が割り当てられたが、吉河三郎は、河の堰を担当している²⁵⁾。

また、1596(文禄 5)年、豊臣秀吉の命により、諸大名へ淀川の左右堤防(文禄堤)の築造が命じられた²⁶⁾。毛利氏には淀川右岸の 15,281 間が命じられ、このうち吉川広家には右岸の山崎 4,000 間が割り当てられている²⁷⁾。このとき、広家は、自ら工事現場に赴き、家臣へ資金調達を命じるなど、積極的に活動している²⁸⁾。

このように、吉川氏が古くから河川に対する土木技術を積み上げていたことが、岩国移封後の河川改修や錦帯橋の創建につながっただけではなく、近世岩国の大きな特徴の一つである開作事業²⁹⁾の盛況をもたらしたといえよう。さらに、手伝普請などの全国的な土木工事へも活かされることとなる。

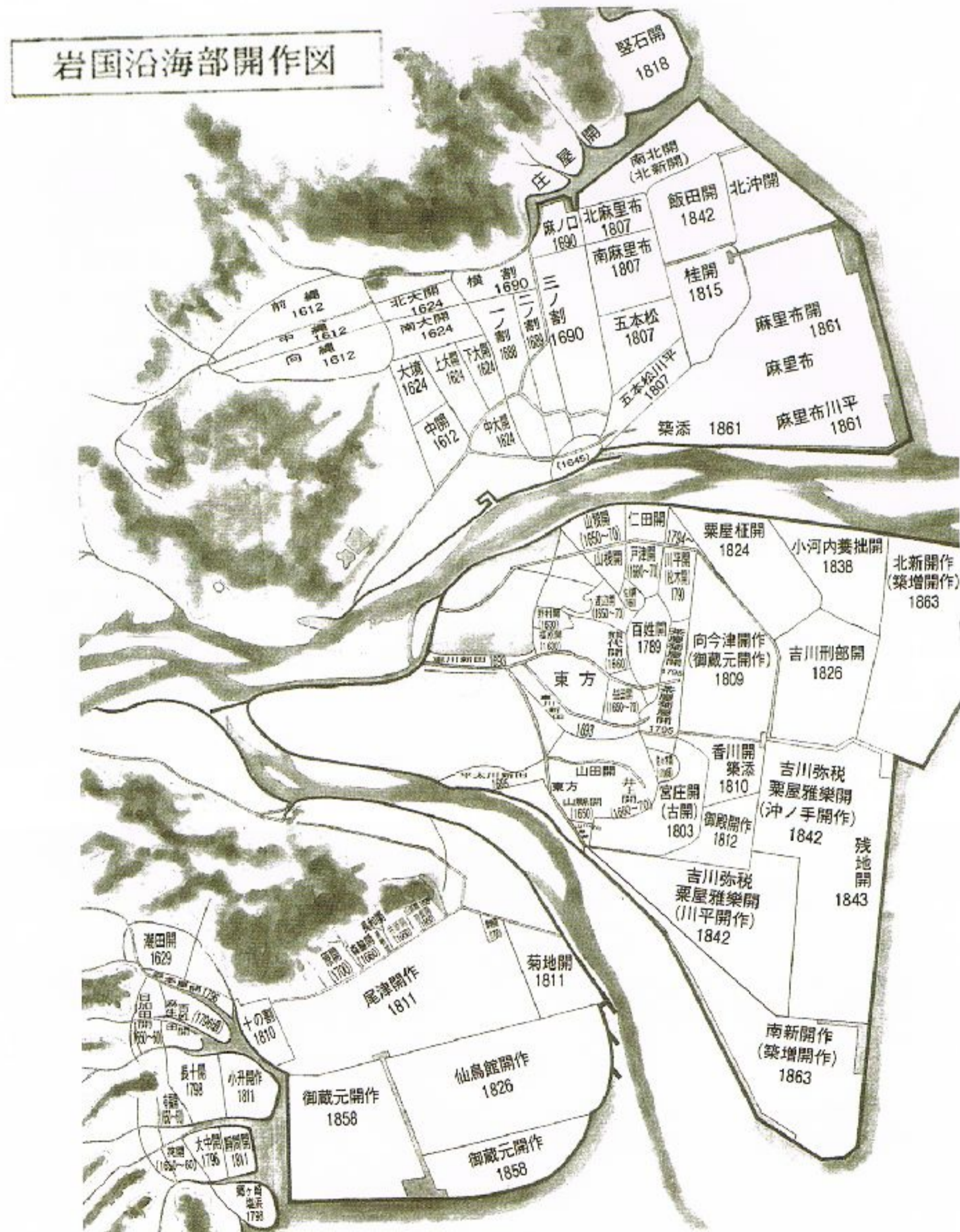


図 1.2-9 岩国沿海部開作図(文献 29)より引用)

また、石垣については、吉川元春館(国史跡 北広島町)や今田氏城館跡(広島県史跡 北広島町)などの遺構から、岩国移封以前からの吉川氏の石垣技術を知ることができる。そのほか、1592(天正 20)年からの豊臣秀吉による朝鮮出兵(文禄・慶長の役)の際には、出兵した大名が朝鮮半島南部に拠点として日本の城(倭城)を築いているが、吉川広家も東菜倭城や固城倭城などを築き実戦で使用された。加えて、表 1.2-1³⁰⁾に示すように多くの課役を負担する中で、石垣の工事に多くかかわっていることもわかる。これらは諸大名の戦費消耗として特に西国の外様大名に多く課せられたものであるが、多額の財政負担の代償として、多くの現場を経験したことが、吉川氏の石垣技術をさらに向上させたといえよう。もっとも江戸城本丸の石垣の工事に充てられていることから、すでに吉川氏の石垣技術は国内で周知されていたとも考えられる。

表 1.2-1 江戸初期における吉川氏の課役・軍役(文献 30)より引用)

年次	件名	備考
1650(慶安三)年	江戸見附普請手伝	
1635(同十一)年	江戸城普請手伝	
1628(同五)年	大坂城普請手伝	
1625(同二)年	大坂仕置普請手伝	
1624(寛永元)年	大坂・二条城両城普請手伝	
1621(同七)年	西宮仕置普請手伝	三年継続
1620(同六)年	大坂城普請手伝	
1619(同五)年	広島城受取出兵	戦に至らず
1618(同四)年	伊豆仕置石	
同 年	西宮仕置石普請手伝	三年継続
1616(同二)年	江戸屋敷普請手伝	
1615(元和元)年	大坂夏陣出兵	戦闘には不参加
同 年	大坂冬陣出兵	江口川堰の築造 大坂城石垣破却も課役
1614(同十九)年	江戸城石垣普請手伝	
1612(同十七)年	伊豆仕置石手伝	二年継続
1610(同十五)年	名古屋城普請手伝	
1609(同十四)年	丹波篠山城普請手伝	
1608(同十三)年	同城再普請手伝	
1607(同十二)年	駿府城普請手伝	
1606(同十一)年	同本丸普請手伝	
1603(同八)年	江戸城普請手伝	
1602(慶長七)年	伏見城石垣修理手伝	

(2) 手伝普請

豊臣政権は、前述の文禄堤だけでなく、大坂城や聚楽第の築造の際にも諸大名に賦役を課したが、江戸幕府もまた、開府後間もなく江戸城、駿府城、彦根城、名古屋城、高田城等の普請の手伝いを課した。これは徳川政権を強固なものにすることが目的であり、要所の守りの強化と、西国の外様大名を中心とした諸大名の戦費の消耗が狙いであった。また、大坂の陣の後には、江戸城の拡張工事、大坂城、二条城の改築工事を行い、この際にも諸大名へ手伝いをさせた。吉川氏も前出の表 1.2-1 のとおり、多くの工事にかかわっている。

その後、1704(宝永元)年、幕府直轄領と多くの小藩が接していた利根川、荒川の水害の復旧工事について、高知藩主山内豊房、秋田藩主佐竹義格、広瀬藩主松平近朝(鳥根県)、人吉藩主相良頼富(熊本県)へ手伝いを命じ、以降、手伝普請が制度化された。しかしながら、領外における工事には家臣の派遣、滞在費や資材の調達費が多くかかったため、後には金納となった。

岩国からは、萩藩とともに、1742(寛保 2)年に上利根川、1766(明和 3)年に木曾三川へ派遣されている。これは萩藩を通じて、幕府の命令が伝えられたものであるが、萩藩の支藩である長府藩や徳山藩は派遣しておらず、岩国領のみ派遣している。その要因は、本藩と支藩の対立に

より、1635(寛永 12)年の江戸城普請の手伝いをはじめ、長府藩と徳山藩が、ことごとく手伝いを辞退している³¹⁾ことから、政治的な理由があったことも確かである。しかしながら、岩国藩の技術が派遣するのに充分足るものであったことと、その経験が後の領内における土木工事に活かされたことも考えられるであろう。特に 1766(明和 3)年の木曾三川については、1754(宝暦 4)年から 1755(宝暦 5)年にかけて薩摩藩によって築造された洗堰(分流する河川の流量調節のための堰)が破損したため、新たに築造する工事を担当しており、大藩のおこなった高度な技術が必要な工事を成功させている。

また、土木ではないが、1742(寛保 2)年の上利根川の手伝普請では、妻沼(現在の埼玉県熊谷市妻沼)を訪れた岩国の技術者の中に、1756(宝暦 6)年と 1760(宝暦 10)年の錦帯橋架替えの際の棟梁を務めた長谷川十右衛門がおり、当時歓喜院の本殿である聖天堂の棟梁の林正清との交流によって、帰国後に貴惣門の図面を正清に送っている。貴惣門は、当時は財政面により着工ができなかったものの、1851(嘉永 4)年に正清の子孫である林正道を棟梁として完成し³²⁾、現在国の重要文化財に指定されている。

(3) 吉川氏の技術者登用

1600(慶長 5)年の関が原の戦いの後、徳川氏による諸大名の大規模な国替えがおこなわれる中、領地を減らした大名は家臣の削減を余儀なくされた。しかしながら、移封によって新たな城下町の形成が必要となることから、大規模な都市計画と普請のための技術者などは新規で召抱えられることがあった。

岩国に移封された吉川氏においても、出雲富田 14 万石余から岩国 3 万石に移封となったことから、家臣団の整理をおこなっている³³⁾。その一方で、児玉新三郎、米村半右衛門、明田久兵衛の 3 人が、毛利一族を尋ねて長州藩へ下る途上に柳井で滞留していた際、吉川広家に召抱えられている。これは当時おこなわれていた岩国城の普請のため³⁴⁾であり、当時の武士階級における技術の重要性を示している。特に、城を含め、完全に一から城下町を形成しなければならなかった吉川氏にとっては有能な技術者は不可欠であった。

なお、後に、児玉家は錦帯橋の設計者とされる九郎右衛門を輩出し、米村家は近江の戸波駿河のもとへ派遣され、錦帯橋の石積の技術向上に貢献した茂右衛門を輩出していることから、この人材登用は、50 年以上後の錦帯橋創建にとっても大きな影響を及ぼしている。

(4) 吉川氏の技術力

吉川氏は、近世以降、家格としては毛利氏の家臣として扱われていたため、その名は土木技術の歴史の中で大きく取り上げられてはいない。しかしながら、長い土木工事の歴史による技術の積み上げに加え、技術者の積極的な登用をおこなったことで築かれた技術力は、日本屈指のものであり、錦帯橋はそれを裏付ける遺産の一つであるといえよう。それは、錦帯橋が、架け替えられる中で素材が変わったとしても、その基本構造が江戸時代と変わらない姿でありつづけることで、示すことができる。また、現在の岩国市の市街地の中心部のほとんどは、近世の吉川氏の大規模な開作により形成されたものであることも忘れてはならない。

参考文献

- 1) 吉川家文書(吉川史料館蔵)
- 2) 吉川家譜(吉川史料館蔵)
- 3) 両国策(岩国徴古館蔵)
- 4) 吉川家文書(吉川史料館蔵)
- 5) 岩邑年代記(岩国徴古館蔵)
- 6) 森脇飛驒守覚書(岩国徴古館蔵)
- 7) 岩国市役所：岩国市史 上, 1970. 小野均：近世城下町の研究, 1928. 三浦正幸：城のつくり方図典, 2005

- 8) 岩国沿革志(小瀬口戦争私記)(岩国徴古館蔵)
- 9) 藩中諸家古文書纂(岩国徴古館蔵)
- 10) 岩邑年代記(岩国徴古館蔵)
- 11) 巖邑志(岩国徴古館蔵)
- 12) 毛利秀就書状(吉川史料館蔵)
- 13) 足利義満御判御教書(岩国徴古館蔵)
- 14) 御家中系図(岩国徴古館蔵)
- 15) 岩邑年代記(岩国徴古館蔵)
- 16) 玖珂郡志(岩国徴古館蔵)
- 17) 御用所日記(岩国徴古館蔵)
- 18) 御触出控(岩国徴古館蔵)
- 19) 享保増補村記(岩国徴古館蔵), 玖珂郡志(岩国徴古館蔵), 岩国沿革志(岩国徴古館蔵)
- 20) 岩邑年代記(岩国徴古館蔵)
- 21) 岩邑年代記(岩国徴古館蔵)
- 22) 玖珂郡志(岩国徴古館蔵)
- 23) 足利義満御判御教書(岩国徴古館蔵)
- 24) 享保増補村記(岩国徴古館蔵)
- 25) 清水市：清水市史, 1976
- 26) 吉川家譜(吉川史料館蔵)
- 27) 吉川家文書(吉川史料館蔵)
- 28) 吉川家譜(吉川史料館蔵)
- 29) 岩国徴古館：岩国地区開作関係資料, 1967
- 30) 岩国徴古館：岩国藩財政史の研究, 1986 (一部加筆)
- 31) 山口県：山口県史 史料編 近世 2, 2005
- 32) 埼玉県立博物館：刻まれた鼓動 歎喜院聖天堂の建築彫刻, 2005
- 33) 岩国市役所：岩国市史 上, 1970
- 34) 御家中系図(岩国徴古館蔵)

その他の参考文献

- 35) 岩国市教育委員会：岩国城下町, 2005
- 36) 岩国市役所：岩国市史 通史編一 自然 原始 古代 中世, 2009
- 37) 岩国市教育委員会：岩国城跡発掘復原報告書, 1997
- 38) アーカイブス利根川編集委員会：アーカイブス利根川, 2001
- 39) 岐阜女子大学：木曾三川 明和治水を語る, 地域文化研究 第22号, 2005